

レッシング

アンチ・ゲッツェ (一)

井 汲 越 次 訳

アンチ・ゲッツェ

主任牧師ゲッツェ氏の『フライヴィッリゲ・バイトレーゲ』に対するやむなき反駁^一

その一

(しまいまで首尾よく参りますように!)^二

multa sunt sic digna revinci, ne gravitate adorentur. Tertullianus.

「多くのことは反駁されてこそ真価がわかるものだ。テルトゥリアヌス」^三

— 三 —

(『フライヴィッリゲ・バイトレーゲ』第七十一号参照)

主任牧師 兄

どうか、そうが、みがみがなりたてないで下さい。お願いです。——こうも早くあの果し状に云った通りならざるを得ないとは、われながら有

レッシング アンチ・ゲッツェ

難しいことはありません。でもそうでもしなければ、なかなかこちらの真意もおわかりにならないでしょう。——敢えて書中を以てあなたに戦を挑むわたしの胸中もほおわかり下さるでしょう。大方は冒頭のテルトゥリアーヌスの標語からでも、後出の言葉からお察しの通りです。一週間毎にああ大声でまくしたてられたのではかまいません。どこでだか、場所は先刻御承知です。だが、何もそうわたしのことを目の仇にしなくてもよさそうなものではありませんか。

あなたやニーダーザクセンの校長先生方が挙ってわが匿名氏^六に対して論陣をはられたことについて、わたしとても別にとやかく云うものではありません。むしろ痛快な位です。というのは、わたしがあれを公表したのも、なるべく多くの人に検討され、なるべく多くの人が反駁できるようにしたからに外なりません。だが今日^{こんにち}、なかなかそうした人はそうざらにいないかも知れませんが、いずれはそうした正義の人の手に渡る日もあるかと、望んでもいる次第です。そしてそうなれば、わたしもあれを紹介したことで、御日課のお説教や新聞雑誌等ですすっていらっしゃる以上にキリスト教のため尽したことになるのではないかと、私かにそう信じている次第です。

何ですって？ わたしの方があなたよりキリスト教を信ずること篤いからと云って、わたしがキリスト教の敵ということになるのですか？ 暗闇を歩きまわる疫病神を衛生課に通告したからと云って、わたしのことをペスト菌を国内に持って来たともいうのですか？ というのは、主任牧師さん——つまり、もしわたしが救い出さなかったら、あの匿名氏なんか葬り去されたのにとでもおっしゃるのなら、それこそ大間違いです。御承知のように、同書はすでに完本として存^{ぞん}していることだし、それにすでに幾冊かは写本となって存しているのです、どういふ経緯^{いきざつ}がよくわかりませんが、偶々その中の第一稿^{一稿}の断片だけが当図書館の蔵書の中に紛れ込んで来たものなのです。それにしても、もしわたしが当図書館所蔵の低地ドイツ語のすべての聖書を一言一句校合して差上げてたら^八、尚勿論もっと世の中のためになつたことでしょうが。

それにしても、この「芳しからぬ」^九断片^{断片}がすでに何冊かの著作を生み、それによって得るところのものが失うべき損失を補ってあまりあると、あなた御自身はつきりそうおっしゃってるじゃありませんか。そうなると、わたしは——この傑れた著作を紹介した *Causa sine qua non* 「^{一〇}当の本人」たるこの私こそ、差詰め帝国最高裁判所の厄介にならなければならぬということになるのでしょうか？ ところが不正を防止し悪事を懲らしめるのが最高裁判所の悲しむべき義務たるのみならず——ヨ一、ゼフ、二世^{二二}のような名君の治下弥々益々啓蒙的な道德の時代となり、最高裁判所として世の中の陰徳を顕彰し、善行に酬いる余裕や材料がどしどし出て来るようになれば、最高裁判所からも早速お褒めに与かるもの

とひそかに期している次第でございます。もっともそれ迄は帝国の地方裁判所では——ゲッツェのようなお考えの方でなければいけないというのも、あながち無理からぬことではございますが。

それが、二百五十年前にあれだけ真剣でやっていながら、宗教改革というものを一切無にしてしまうような措置を最高裁判所にとらせようというのだから、このルッター派主任牧師もなかなかどうして、天晴れ、大したルッター精神というものです。当時いまだに何処の神学博士にもなかつたような、どのような権利がルッターにあったのか？ 新規に、天地神明に誓って責任ある聖書の翻訳をするようなことは、今日なおいかなる神学者にも許されないことだということのなら、ルッターにだって許されてなかつたことなのであります。附加えて云っておきますが、ルッターには尚更許されてなかつたことなのであります。即ち、ルッターが聖書の翻訳を企てるや、聖書というものが一般人の言葉で一般人に読まれていないのなら、その方がいい位だという教会公認の事実に対して、独力でやってのけたことなのであります。彼はまず教会が真理と認めたこの命題の理由なきことからまず立証してかからなければならなかつたのでした。即ち、まずこの反論の真理を斗いとらなければならなかつたのです。翻訳にとりかかれるようになる前に、すでにその真理を斗いとしたのだとの前提に立たざるを得なかつたのでした。ところがこうしたことは今日プロテスタントの翻訳者は一切必要としません。一般人も一般人の言葉で聖書を読んでよい、読まねばならない、いくらでも読んだがよいということが原則となつてゐる教会に束縛されるなんてことは尚更ありません。だからやればやれることをやるまでのことなので、やれっことないことをやるというのではありません。ところが之に反しルッターの場合は、やって許されるかどうかも甚だ以て危なかしいことをやってのけたのであります。——このことは火を踏るより明かなことなのであります。——要するに、バルトなりその他現代人の翻訳をこきおろすのは——それがいかにルッターのものとは違つていようと——やがてはルッターの翻訳を如上にのせることになるのです。ところが実際ルッターの翻訳にしたところで、当時公認の翻訳とはやっぱ違つていました。だがその間多少の相違の如きは何ら問題ではありません。真のルッター派の要求するところは、ルッターの著作ではなく、ルッターの精神によって護持されてゐることでありまして。ところがそのルッターの精神が絶対に要求しているところは、何人に対してもその人自身のよしとするとともに従い、真理と認むるところに邁進するのを妨げてはならないということなのであります。一、人でもその人の認識の進歩を他人に伝えるのを禁じようものなら、之によつて、すべての人を妨げることになるのです。というのは、この個々の伝達ということがなければ、全体としての進歩ということも全然不可能だからであります。

主任牧師さん、お蔭様でもしわがルッター派の主任牧師たちがわが教皇ということになり——その教皇たちがわれわれの聖書研究の中止すべき箇所を規定することができ——さらにその教皇たちがわれわれの研究や、われわれの研究対象の報告を抱束し得るというようなことにも相成りますれば、わたしは率先してこれら群小の教皇たちに代えるに元通り一人の教皇を以てせんとするものであります。——今日、断乎としてこう云いきれる者はそう多くはないでしょうが、断乎そうした考えをもつ者はきつと益々多くなることでしょう。そうして、主任牧師さん、一所懸命できるだけ多勢のプロテスタントをカトリック教会の懐ふところに追いかえすがよろしい。こうしたルッター派の狂信者こそカトリック教徒にお誂え向きです。あなたは神学者で、政治家だし——

ところでわが隣人のお談議だが、著者の善意についてはさきに拙著『第二答弁』^{一四}の中で、できるだけ公平に論評しておいたところです。それでもしなかったら、あたら傑作も塵溜の中に埋もれてしまいかねないといった式のものでした。主任牧師さん、過日このお談議に答えるようにとのお話しがあったので、すでにお答えいたしておいたのは、勿論御承知のところですよ。それで今度はあなたのしゃべる番です。ところでいくらあなたのおやりになってる聖書解釈がそうだからと云って、そいつは神のみ言葉を理性的な人間の眼に滑稽化するよう、わたしに要求することになるのです。匿名氏の異議申立に対して従来行われてた立派な回答なんぞより、わが隣人諸子のいうところの俗人輩のこなれのわるい着想の方をおとりになるのは、どうしたわけなのですか？ またどの面さげてそんなことをわたしに要求されるということに相成ったのです。

この種の著作の第二は、マ、ー、シ、ョ、ー、氏著『キリスト教弁護』ですが、これは云い得べくんば、マ、ー、シ、ョ、ー、氏のためのキリスト教弁護といったものです。実は、この弁護として同氏の弁護される宗教ほどには氏独得のものとはなっていないのであります。それにどうですか？ 主任牧師さんあなたもこれで今年七十一回目に太鼓をたたくのだが、まだ読んじまっては——全部読んじまってははいないんじゃないんじやございせんか？——そうでしょうが。

そうなると、ハンブルクのゲツェ商会には、榊一五も秤も幾通りも違ったのがあるということが読者にわかったときは、時すでに遅し！ だったかのも知れませぬ。

さらでだに御大家の同商会のことをこうくさささざるを得ないのは、残念なことですよ。だが同家としたところで、少くとも古いお顧客先には自家の正確な完全を秤を用ってもよさそうなものじゃないありますまいか？ それをその自家の正確な完全な榊は、始めしか用わず、折角のお顧

客を逃がすという法が何処にありましよう？

あわれなマーシ、ヨ、よ、わが田にばかり水を引こうとするこのやきもち、焼きのことなんかいい加減に切上げるとしましよう。あの男ならちゃんとお宅まで提灯をつけてくれますよ。今のところ一生懸命あなたがどっちの側にたなびいでいらっしやるか、気がつかないみないな振りをしてますがね。あの男には援軍が必要なのです。△Tos Rutulusue fiat▽〔トロヤ人であれ、ガリシア人であれ^{一六}〕——彼の味方はきつと新聞紙上では増える一方です。だがちょっと待って下さい！

こうした手紙で、宛名とは別の人に話しかけて、失礼にならないだろうか？ それではまた話を元にもどして、主任牧師さん、重ねてお伺いいたしますが——あなたはマーシ、ヨ、氏の、弁護を激賞されておられるが、ほんとにあれを読まれたのでしょうか？

ほんと？——そうなると、主任牧師さん、これでもうあなたを有罪とする証拠があがったことになります。実はあなたは主^{一七}にひとしく憎まれる幾通りもの柵や秤をもっておいでなのです。あなたは一方ではうまいことわたしをひっかけながら、他方ではマーシ、ヨ、氏にとり入っているのです。わたしのところじゃ彼奴に気をつけろと云ってるのに、マーシ、ヨ、氏のところじゃ盛んに褒めそやしているのです。わたし用の処方じや、有毒だ、生命にかかわると云って、投薬もしてくれないのに、同じその薬をマーシ、ヨ、氏の方へ行くと、同量でも、致死量でも、一向害にならないよく効く薬だと云って売りつけているんです。

それともこいつも、主任牧師さん、こいつはあなたの含蓄ある隠喩でいう薬の盾^{一七}という奴なのでしょうか？ あなたはああ云ってわたしのことを世間の物笑いの種にし、鼻つまみ者とされて来たが、外ならぬその薬の盾という奴を盾にマーシ、ヨ、氏も遮二無二喰ってかかって来ているのです。ところがこの薬の盾という奴なんです、わたしがこの腕につけたときには一向何の役にもたないのに、それがあの男の腕につけると、なかなかどうして大した武器になるのは、これやまた一体どうしたわけなのでしょう？

というのは、いかにも聖書には啓示^{一八}ということは入っているが、そんなものは啓示でも何でもない、と、マーシ、ヨ、氏も主張していなさる（二〇頁）ではありませんか？

マーシ、ヨ、氏も聖書の文字と精神とは区別されている（二四九頁）ではありませんか？

マーシ、ヨ、氏も聖書より以前に宗教は存在していたと（二〇四頁）を説かれているではありませんか？

そしてこの三つの命題こそ、主任牧師とわたしとが喧嘩をおっばじめるに至った抑々の原因なのではありませんか？

それなのに主任牧師さん、そんな命題なんかマ、シ、ヨ、ト氏にはなかったかなどとは云わせません。一言一句はつきりそう書いてあったばかりじゃない。マ、シ、ヨ、ト氏の云っていることは、みんなこれと関係あり、みんなこれに基いていることなのです。

いや、それ以上です。これらの命題は自分にはどうやら空虚な考察としか思われませんが、キリスト教は神学なんぞなくとも事足りりと云ったり、また事足りているに違いないんだが、この連中はそれで安んじているようなのです。ところがこの命題こそまさしくマ、シ、ヨ、ト氏が、キリスト教ではない、神学なるものの根本命題としておっしゃるインスピレーションの全体系は——お互に共通した問題ながら、お互に意見の一致を見ている

というの、主任牧師さん、あなたのおっしゃるインスピレーションの全体系は——お互に共通した問題ながら、お互に意見の一致を見ているこの共通の命題についてわたしに反対なさるのは、このインスピレーションの精神によっておられるからなのだが——これがマ、シ、ヨ、ト氏の場合はどうか？——私とは大分違っているのです。

即ち氏によると、これこそわが匿名氏を自然主義に陥れた所以のものに外ならないのです。氏によると、これこそわが匿名氏よか頭の出来るわるい連中が悉く自然主義に陥らざるを得なかった所以のものに外ならないということになるのです。それが氏の場合であり、それがまた全頁に亘っているのです*。

*序説、四、八、十、十二頁参照。同本文、二五八、二七一、三〇六頁、その他一々はあげず。

そうになると、主任牧師さん、用心なさい！ マ、シ、ヨ、ト氏の色目に用心なさい！ マ、シ、ヨ、ト氏によると、あなたまで、いつの間にかわが匿名氏がのたうちまわっている奈落の底に落っこっていることになるのです。そうなればもう進退谷まわりで、全然絶望ということか、でなればもう五十年から六十年前われわれの教科書に宗教と呼ばれてた代物しろものなんかきれいさっぱりかなぐり棄てるとともに、あの当時から宗教をもとに発明考案をかさね、いまなお毎日製作中の美事な七つ道具を一切合財宗教と認めるより外、仕方がないということになるでしょう*。

*序説、十五頁。——本文、三、四頁

それどころか、あなたの目の前でマ、シ、ヨ、ト氏自身が考え出したそうした美事な七つ道具を、しまいはあなたまでもいい加減認めざるを得ない羽目になるでしょう。氏は善良な普通のキリスト教徒の誰一人知りもない、誰一人聞いたこともないようなものをちゃんと御自分の手提げ

袋の中に用意していなさるのです。われわれがついうっかり忘れてしまった或種のユダヤ思想とか、聖霊降臨祭の大奇蹟とか、——何やかや！
* 八二頁——* * 一一三頁

それにしては、おお、このハンブルクの現地でハンブルク教理問答に、またまた何たる災難がふりかかって来たことか！ というのは、マ、
シ、
ヨ、
ト氏こそかねがねわれわれのこれまでの宗教教育に不満やる方なく、これに対し訂正改善の必要なことをはじめてあの怪しからんわが匿名
氏の断片の中に認めるに至った当人に外なりません。何はさておき、わが教理問答のことがあの先生の念頭にあったに違いありません。でなけ
ればどうしても都合がわるいのです。

* 序説、十三頁。本文、二六、三六、七一、一一一頁等々。

どうです、主任牧師さん、それでもいいとおっしゃるのですか？ さきにわれわれの良き友、アルベルテ一九がそんなようなことを考えつく
や、ハンブルクの教会がそれをやらせないようにしたのは、誰であろう、あなたのお蔭だったではありませんか？ それなのに偶々あなたの御
注意、あなたの御熱意が悉くわたしに集中されているところから、マ、
シ、
ヨ、
ト氏ならやっさいとおっしゃるのですか？

それならそれで、世間の要望もあることだし、こうした宗旨変えということもよくお認めなすって、どうぞ、わたしのことなんか放つとい
下さいませんか。わたしとマ、
シ、
ヨ、
トとがお互に諒解することだって、あながちなきにもあらずです！ だがわれわれの計画がうまく
行くようなら、こんなことは二度と申上げるまでもないのであります。

アンチ・ゲツエ

その二

Bella geri placeat nullos habitura triumphos! Luc.

〔勝つてこない戦いをやろうというのなら、やってごろうじ！ ルーカーヌス〕

レッシング アンチ・ゲツエ

主任牧師兄

わが神聖窮りない宗教に對するわたしの——とは、何も今にはじまったことでないあなたの嘘だが——直接間接の論難攻撃に對するさしあつたの御反駁、復活祭の前夜落手、一番搾りの銘品有難く頂戴いたし、善き哉、祭日の御祝儀と賞味いたしました。続いて二番搾りも玩味させていただけば、身の保養にも相成るべくと存じております。

それにしても、これはしたり、さしあつたの御反駁とこのことだが、こちらまさしずめひとひねりして先走つての御反駁とでも云いたいところ*。同書中、主任牧師さんは拙文の Äquivoken^{*}〔わけのわからぬこと〕をいやつというほどきおろしておいでだが、わたしとでもここで下手な駄洒落をとばして、Vorlauf〔一番搾り〕とは、葡萄酒の搾り汁のことか、それともブランデーのことか、予めことわりもしないで、Vorläufig〔さしあたり〕という言葉に、Vorlauf〔先走り〕という言葉をかけて下手な駄洒落をとばしてみただけです。

*主任牧師さんはこれを Equivoken とされておられるが、それが一度や二度のことではない（序説、七、九頁本文、五五頁）。だからこれは単なる書き間違
いと、誤植というようなことではなさそう。好んでこうした悪ふざけの綴字法をとられ——同じく駄洒落をとばしているのである。Aequivocum quas

dicas, equi vocum^五〔まじったく馬の啼声よりわけのわからぬことだ〕実際、馬の啼声よりわけのわからぬこととはどういうことか？ カルダーノみたいに馬の啼声に明るくないわれわれにとってはまじったくわけのわからぬことだ。——それとも主任牧師さんはこらでひとつ、大いに洒落のめしてやろうと、同時にルッターが彼のヴォルフエンビュッテルの道化役^六の中でつかった言葉を念頭におかれているのだろうか？ とところが実はこのヴォルフエンビュッテルの司書が氏に同書のことを想起させ、更に同書が氏にこの言葉を想起させたものなのである。私としても氏がこの洒落を嗅ぎ出されたことは欣快に堪えないが、これとてルッターの模倣だと云いたい！

むしろそれよりか、主任牧師さん、わたしの第二の天性となつてしまった弱点をお救し下さい。誰でも人にはそれぞれみなその人特有の鼻があるように、それぞれその人特有の文体があるものです。そしていかにその人の鼻が不恰好だからとて、真っ正直なその人をからかったりするの失礼でもあり、キリスト教徒らしからぬことです。わたしにはこれよか外、わたしの文体がないのでして、こいつはいまさらどうにも仕方

がないじゃありませんか？ 無理にそう器用な真似ができないのは、わたしとてよく承知しております。それも事をじっくり考えた揚句、非凡な芸当も身につくようになるのでして、そういうこともよく承知しております。冷静に考えて、材料をこなしにかかろうとすればするほど、文体も材料とじっくりしたものになるのです。

どう書くかということはお互にそう大した問題ではないのでして、どう考えるかってことの方がずっと大事なのです。ところであなたのおっしゃろうというのも、こういうことではないんでしょうか？——とかく、もってまわったような美辞麗句にはどうしてもあいまいな違った意味が入って来るといふこと。極めて個人的な、しかも平々凡々たる表現をつかわなければ、なかなか正しい明解な考え方はできるものでないといふこと。冷たい象徴的理念に何らかの方法で何らかの温かさや生命のある自然な標識ヒを与えようとしたところで、とても真は得られるものではないといふことです。

傷の深いのを刀が鋭利だからとはせず、刀がキラ、キラ、光っているからだとするのは、可笑しかありませんか？ それと同じことで、味方より相手側の方に真理があればこそ、相手側の方が優秀ということになるのに、それをギラギラした文体のせいにするのも、これまた可笑しな話ではありませんか？ 事実、ギラギラした文体にしる、多少とも真を得ていけばこそ光っているのであって、そうじゃないなんて聞いたこともありません。真のみがよく本当の光りを与えるものなので、なんのかのと悪口を云われ馬鹿にされようと、真理は鏡の裏に張った箔のように底にのこるに違いありません。

では、今度は文体のことではなく、この真理のことを話すとしましよう。——わたしはわたしの文体のことは世評に委せきりにしているのだが、これとて勿論演劇のためには少々墮落しているかも知れません。これがわたしの文体の他の多くの文体と著しく違うようになった所以だといふことですが、この欠点ならよく承知しております。およそあんまり目立って違ったものというのはずで欠点です。わたしもあやうく、あのオヴィディウス八のように、洗いざらい欠点を洗い出そうとする芸術批評家たちに、どうかこればかりはひとつ大目に見てもらいたいたいです。りかねないところでは、こいつは文体の欠点じゃない、文体の原罪メタファなのです。すなわち——これは文体上の隠喩メタファにはついてまわっているもので、それがまた往々隠喩を直喩に仕立てたり、それどころか寓喩に仕上げてしまうものなのです。そのためにお互にかけ離れすぎて相通じやすい、*tertium comparationis*^{一〇}〔共通の第三者〕になってしまふこともよくあることなのであります。わたしの劇作の仕事がこれまた一

層この欠点を助長した嫌いがあるかも知れません。というのは、対話に対する心遣いから、比喩的な表現には一々細太洩さず注意する癖がついてしまっているからです。おそらく実際の会話でも理性が舵をとっている場合は少く、殆んどいつも想像力が会話を進展させているので、話の運びは大抵甲なり乙なりの人がつかつた隠喩に由来しているからでしょう。うまいこと真似た、こうした現象のみがよく対話に円滑自在な真実性を与えるのです。隠喩でも、実際われわれを一番ぐいぐい引きずって行く流れが見出せるようになるまでには、どんなに長いこと丹念に何遍も吟味してかからぬばならないかわかりません。そうなると、演劇は偉大な散文作家をつくらずというのも、あながち無理からぬ話かも知れませんが、あれほど素晴らしいことにはならないんじゃないか。あの種の著作なら思想の方向は相変らず同じでもいいが、対話ということになる時々刻々千変万化するものです。前者の場合は一步一步同じ歩調にひた押しに進んで行けばいいのだが、後者ともなればどうしても時々飛躍が必要です。時には高いこと跳躍したとて、上手な名舞踊家ということにはならないのであります。

ところが、主任牧師さん、これがわたしの文体なのです。だがわたしの文体は、わたしの論理ではございません。——どうしてなかなか！ 実際、わたしの論理にしてからが、わたしの文体たるところのもの——演劇の論理と云わば云えます。あなたのおっしゃる通りです。まあ、それはそれで何とでもおっしゃい。優れた論理というものはいつも同じで、何にでも応用がきくものです。それどころか何処でも応用の方法は同じです。喜劇の中で論理を示す人は、説教にもきつと事欠かぬでしょう。同じ説教にも論理のない人は、天下に尽せぬ冗談をとばそうが、それ式のことでは到底喜劇ひとつ書けるものじゃありません。ア、ブラハム神父三がいい喜劇を書いたなんて信じられますかね？——どういたしまして。というのは、彼の説教があまりにもつまらないからです。だがモリエールやシェークスピアが、舞台の代りに、説教壇に立とうなら、きつと立派な説教をやったのけたせと云ったところで、誰一人が疑うものがありません。

主任牧師さん、かつてあなたがあの善良なシユ、ロツ、サー三のことを喜劇をもした嫌で厳しく追及されたとき、思わず二つの疑問が浮んだものです。第一の疑問は、説教家だつて喜劇を書いてかまわないじゃないか？——これに対してわたしはこう答えたものです。書けるなら、書いたらいじゃないか？ 第二の疑問は、喜劇作者が説教なんかやつかまわないか？——これに対してわたしの答えはこうでした。説教したいなら、したらいんじゃないか？——

それにしても、何だっていまさらこんなお喋りをやらかすのか？ 文体論や演劇論みたいな、こうしたるく、でもない話がいまさら何だというのか？ 恐るべき裁判沙汰が身にふりかかって来ている現在、情容赦もない告発人が目前に立ちほだかって、死刑だ、追放だと、がなり立っているのです。それだのにわたしときたら、馬鹿な！ 傍らにつっ立って、悠々相手の着物についた羽毛をとってやっているなんて——

それあ、わたしだって爆発せざるを得ません。——でなければ、わたしの落着き払っていること自体、わたしの冷い態度自体、かえって批難的となるでしょう。

どうです、主任牧師さん？ キリスト教に対する直接間接の論難攻撃をわたしのせいにされるなんて、随分恥知らずじゃありませんか？ 今日、わたしのことを異端の外道のと悪口をたたいてられるが、みんな以前乃公御自身のお口から聞かされ、承わって来たことなのです。それをいまになってどうして世間に吹聴させまいと、そう妨害されるのです？ どうしてそう妨害されるのです？ 不実には相呼び相重なるとか。わたしがあなたみたい面つらの皮が厚くないということ、ただそのことがお邪魔なんです。わたしは自分の実証できないようなことは申し上げません。ところがあなたときたら——週一日きりでいいことを、一週七日ぶっ通しおやりになるんです。お喋りはする、悪口はたたく、怒鳴りちらす。むつかしい証拠調べなら教会がやってくれるでしょう。

ところがあんな業々しい表題をつけて——このゲツツ、エ、御蔵版所収のものときたら、さきに「フライヴ、イツリ、ゲ・バイト、レーゲ」に掲載ずみものとか、同紙お誂え向きの駄文しか入っていないじゃありませんか。実際同書所収のものといえ、三番煎じの残り汁で、わたしなんかでちとつくの昔に猫にくれてやったような代物なんです。だのに主任牧師さんのお子さんがたに、散々食い散らしたこの残り汁を又々頬いっばいどうしてもかき込ませようというんでしょか。

歴つきとした学者ともあろうものが——神学者とは云いますまい——あのような表題をつけ、相手の論告なんか頬かぶりして、負けと決った告訴状をいまさらのめと世間に公表しようなんて、理不尽なことではないでしょうか？——「それじゃ相手の反対論告なんか全然御存知ないんじゃないか？」——どういたしまして！ 反対論告のあったことは、百も御承知なんです。ちゃんと聞いておられるんです。ただまだお読みじゃないだけのことなんです。だがこれに答える必要があるかどうかわかるのは、祭がすぎてからでしょう。——

それはそうと、主任牧師さん、それはそうと人を陥れるようなさんぶ讒誣中傷をこう激しい口調で繰り返されるなんて、ずいぶん苛いじゃありません

んか？——じゃ、あなたは全知全能ってことですか？ じゃ、嘘いつわりはつかないってことですか？ それじゃ、わたしの反駁にはわたしの身の潔白のあかしをたててくれるものは、何ひとつなく、あなたの告訴を一部でも撤回させるようなことは何ひとつないってことじゃありませんか？ それじゃ、一度こうと思ひ、ああと思ひ込んだからには、今後永久にそうだと云いきれますか？

ただひとつこの一点だけは、主任牧師さん、あなたなりにどうにか恰好をつけてもらいましょう。だが祭の前は、被告の弁論なんか聴いてる暇もありますまい。告訴を繰返し、被告の名を絞首台にうちつけるが宜しい。被告の弁護によってその名を撤回すべきか否や、おわかりになるのは、いずれは祭がすぎることでしょう！

こんな男に、いささかなりとも敬意を表するなんてことがあるでしょうか？——第三者ならいざ知らず。だが脳天におめおめこう石を投げつけられたんでは、そうは行きません。こんな男には、仕返しにどんな武器をつかってもかまやまい。どんな武器でも残忍無道、この男の遣り口に及ぶものはありますまい。

とはいうものの、主任牧師さん、わたしが報復の限度以上に出やしまいかなどと御心配は御無用です。いかにあなたをからかったり、馬鹿にしたり、攻撃したりするようなことを書こうと、限度に触れるようなことはいたしません。或は失礼な奴と氣に障るような節があるかも知れませんが、不道徳な奴と見られるようなことはまあないでしょう。

失礼といい、不道徳といい、由来この二つの言葉はまったく意味は同じに違いないにしても、その間の相違は非常に大事なことで、何処までもこいつは永久にお互いの間にのこることでしょう。ただあなたの論争の仕方が不道徳なものには、この際わたしとしてもできるだけ明かにさせおきたく、甚だ失礼ながら、こうする外、仕方がなかった次第です。

いざ、わが弓は満を持しております。といて、一度に一本以上お見舞申上げるわけではありません。水桶の腐り水の中に突込んで、溺せられてやるぞとおっしゃるのなら、憚りながらこちらもあるあなたの脳天にくみつき、びしょ濡れにしてくれるまでのことです。

訳者注

テキストには、パウル・リッラ編のアウフバウ版（第八卷所収）によった。

因みに同書の注は、クリューゲル（Dr. Joachim Krueger）が担当している。

レッスングの原注は、*印を附し本文中に組入れた。

なお、本文を読み下すに直接必要と思われた分は角括弧内に編入した

その一

注一 『フライヴィッリゲ・バイトレーゲ』——原名詳しくは『Freiwillige Beiträge zu den Hamburgischen Nachrichten aus dem Reiche der Gelehrten』で『ハンブルク學術論叢』とでも訳すべきか（以下論叢と略）。レッスングとハンブルクの主任牧師ゲッツェ（Johann Melchior Goeze, 1717—186）との反目は、レッスングが理神論者ライマールスの遺稿『——一名、合理的敬神家をために論ず』『Apologie oder Schutzschrift für die vernünftigen Verehrer Gottes』なる尨大な遺稿の一部を、ウォルフエルビュッテル図書館長として、未検閲のまま同図書館紀要に発表したことに端を発する。同稿は当時の最も先端的理神論の立場から聖書によりながらキリスト教の成立を説明しようとしたものだが、極く狭い同好篤学士のために書かれたもの故、決して公表を宛にしたものではなかった。それをこの碩学の死（一七六八年）後、遺児ルイーゼ嬢からその一部を托されていたのを同家の許可を得て、レッスングがこれを『ヴォルフエルビュッテル図書館紀要』（詳しくは Zur Geschichte und Literatur aus der Herzoglichen Bibliothek——以下『紀要』と略）の一七七四年の第三号に『アダム・ノイゼル論』（Von Adam Neuser）の次に、『理神論者の寛容について一匿名氏の断片』『Von Duldung, Fragment eines Ungenannten』と題して、編者の略注付で目立たないように掲載したのだった。その中でレッスングはこれを同図書館の書庫に埋れていた古文書の中から発見したもののように云いつくろい、原著者はウェルトハイム聖書の翻訳者、シュミット（Joh. Lorenz Schmidt, †1750 Wolfenbüttel, なおシュミットについては、前記『理神論者の寛容について』の外、後出『アンチ・ゲッツェ』その九参照）ではないかという憶測までつけているから随分念の入った次第である。もっとも、これを発表するについては、レッスングはライマールス家から筆者の本名を明かにしないと言質

レッスング アンチ・ゲッツェ

をとられていたのだった。これよりききレッシングは『紀要』については、宗教と良俗に害することはあるまいというので、一七七二年二月十三日当局から検閲免除の特典を得ていたのだった。従ってこれは当時のレッシングとしてまことに「やむない」窮余の一策だったのである。次いでレッシングは翌一七七四年末、『旧新聖書經典の自由研究』と題してライマールスの論文を本屋から発表させようとしたが、うまく行かず、やむなくまた一七七七年に漸く『紀要』第四に『啓示に関する匿名氏の若干の断片』として、上記『アポロギー』の中から左に示す五篇の断片を発表するとともに、最後に『編者の反論』を添えて『断片』発表者として編者自身の立場を明かにした。

断片第一 説教壇上で理性を蔑にすることについて。

断片第二 万人が成程と信じられるような啓示のあり可べからざることについて。

断片第三 イスラエル人の紅海渡行について。

断片第四 旧約諸書は一宗教を啓示するために書かれたるにあらざること。

断片第五 復活史考話。

編者の反論。

この「編者の反論」の中で編者レッシングは断片氏の所論の当否はともかく、徒らに遠敬することなく大いに学問的論議の起らんこと期待しているが、やがて教会関係者のみならず、識者の間に多大の反響を呼び起し、ここに有名な「断片論争」が起ることになったのである。ところが、この断片は筆者ライマールスの合理主義的精神から、聖書に記されたキリストの奇蹟を疑ったものだけに、教会側の憤激を買うのは当然であった。ゲツェもその年十二月十七日、福音派の機関紙『フライヴィリゲ・バイトレーゲ』紙上で、H氏（Hは編者Herausgeberの頭文字）とただで、特に名指しはしなかったがレッシングに対し、「今後ともH氏は御自分が長となっておられる図書館の宝庫の中からこのような有害、忌むしいものよりもっと良書を提供してもらいたいものだ」とクギをうった。レッシングは匿名で、翌年三月『譬え話』《Parabel》の附録に『お願ひ』と『果し状』（注四）を書いてこれに応酬した。その際、冒頭に——一と番号をうってこの『アンチ・ゲツェ』を続けるつもりであることを示した。これに対してゲツェは「思うにレッシングは彼のあげた矛盾をば真理なりと宜し、明かに従来の全キリスト教及びルッター派の教理と信条に反対しているのだ」ときめつけた。ここにおいてレッシングは三月同

じく『公理』(Axiomata)を、——二と番号をうって発表、『断片』の紹介者たる編者自身の見解を十項目に要約して、之を疑うべからざる公理とした。従って冒頭に「その一」とある次行に——三としてあるのは、さきの『譬え話』と『公理』をその一、その二とすればこれはその三に当る訳である。

いま読者の理解を補うために『公理』に要約された十項目を摘記することしたい(括弧内の数字はライマールスの『断片』原著の項目に相当する)。

- 一、聖書には宗教に属する以外のことがか明かに含まれている——(三)
 - 二、そうした雑多なものの中、聖書がひとしく謬なきものだとするのは、単なる説定にすぎない。——(四)
 - 三、文字は精神でなく、聖書は宗教ではない。——(一)
 - 四、されば文字並びに聖書に対する論議は、だからとてそのまま精神並びに宗教に対する論難攻撃とはならない。——(二)
 - 五、聖書が出来上る以前にも宗教はあった。——(五)
 - 六、キリスト教も、福音書家や使徒が書かれる以前からあったものだ。かれらの最初の何人かの人が書く以前に、すでに永い歳月がたつていた。そして全経典が出揃わないうちに、すでに主要な経典は出来上っていた。——(六)
- (なお本項以下については、続いて略々同時に即ち一七七七、七八年の冬執筆された論稿『単なる人間的歴史家としての福音書家についての新説』及び『ハネ黙示録序説』等参照。)
- 七、従ってこれらの諸書によるところ多大だろうが、キリストの全真理がすべてこれらに基いているというものはあり得ない。——(七)
 - 八、キリスト教がすでにひろく普及し、またすでに多数の人々の魂をとらえていたことはいたが、同教については今日伝わっているところのものには、一語も誌されていない時代があった。そこで福音書家や使徒たちの書いたものが悉く失われてしまったとしても、かれらの説かれた宗教は存続していようということもあり得ることに違いない。——(八)
 - 九、キリスト教は、福音書家や使徒たちが説かれたが故に真なるのではない。かれらは真ならばこそ、これを説いたのである。
 - 十、書き伝えられた伝承は、その内的真理から説明されなければならない。もしキリスト教に何ひとつ内的真理がなければ、書き伝えら

れたことにもすべて何ひとつ内的真理を附与されることはない。

以上、同書は前掲ゲツェの両論には直接言及していないが、『譬え話』に比すれば論調もやや激しい。ところがここに問題になっている一七七八年三月十八日の同紙所収のマーショアの論文『啓示キリスト教弁護』を読んだレッシングは、始めこれまたゲツェの書いたものと早合黙したらしく、ここに正面切って『アンチ・ゲツェ』と題し、一七七八年四月ゲツェに対する最後の決定的論戦を開始したのであった。これが副題に「余儀なき反駁」とし、更に番号に——三とある所以である。因みにドイツ語の *freiwillig* は英語の *volunteer* にあたるが、同時にルッター派の匂いを出した言葉でもある。

ところが、ゲツェ側の策動によって一七七八年七月六日のブラウンシュヴァイク公国法令で『紀要』の発行停止処分になって、気負い込んだレッシングの『アンチ・ゲツェ』は実質的にはその十一で終り、最後は「その十二」とモットーのキケロの言葉だけで本文はなく、論争は全く尻切れトンボになってしまった。だがレッシングは再び舞台に立ちかえって、『賢者ナータン』に専念することになる。

注二 首尾よく参りますように！——原文は *Gott gebe, lezter!* 日本語流に云えば、「神のまにまに」とでも云うところだが、直ぐその前行に「その一」(Erster) とあることも考慮に入れ、こう訳してみたが、十分自信あつてのことではない。或は何が典拠のある言葉かも知れない。御教示を乞う。

注三 テルトゥリアーヌス。——*Tertullianus, Quintus Septimus Florens* (150/155~225/223) カルタゴ出身の教父、元々弁護士で法律学者だったが、一九〇年頃キリスト教に帰信、ラテン語をよくし初期キリスト教界切つての理論家であるとともに、ラテン語名文家として知られる。当時勢力を得て来たグノーシス派の異端に対し論戦、はやくより碩学の名を擅まに博す。後モンターヌス派に奔り、二九〇年カトリックの正統派と正面衝突し、異端として追放さる。レッシングは初期教父のうちでも就中テルトゥリアーヌスに傾倒した。彼自身独訳に当ったテルトゥリアーヌスの『異端論』は彼の神学論争の云わば筋金となっている。

レッシングがここにモットーに引用したテルトゥリアーヌスの言葉は、ヴァレンチアーノ(エジプト出身のグノーシス派の有力者。一四〇年頃からローマに布教す。この一派は四世紀まで初期キリスト教のセクトとして存在する)に対する有名な反駁書 *Liber adversus Valerianos* 中の名文句。実証的かつ弁証法的なテルトゥリアーヌスの論説の一端と自信の程をうかがうに至る。

注四 果し状——注一にも述べた通り、この絶交状は、一七七八年三月『譬え話』を公刊するに際し、『Eine Parabel, nebst einer kleinen Bitte und einem eventuellen Absagnungs-schreiben an den Herrn Hauptpastor Goeze in Hamburg』という表題で、『お願い』の後に添えられた。『譬え話』と『お願い』とは、一月に成ったものだが、これはゲッツェが一月三十日『フライウィッリゲ・バイトレーゲ』に載ったレスの『キリスト復活史論』の提灯持ちをした論文を読んで、二月に執筆されたものである。『譬え話』は、不思議な宮殿炎上の報に駆けつけたえせ建築通どもが、消火をよそに、各自いい加減な自分の凶面を取出して、徒らに図上の論議をたたかわすが、実は極光を火事だと見間違えて騒ぎただけの話だった。窓も入口もごくわずかなのに、いつもあかあかとしていたこの不思議な殿堂の秘密は、天上から光をとっていたからで、キリスト教を示唆したものであることは云うまでもない。

この話はレッシング得意のパラベルの形式で、『断片』発表にからまる論争の問題の核心をついたもので、レッシングの根本的態度をうかがうに足りる。次の『お願い』という小文では、レッシングは『断片』作者と『断片』発表者である自分とを混合しないように、ゲッツェに頼んだのであった。ところが相手方が一向聴きいれようとしないので、ここに意を決してゲッツェに対してこの絶交状をおくってお互にとことんまで論争を交えることを宣言するに至ったのである。

前二文は十分論争文といったものではないが、彼自身云っている通り、これは明かに「騎士的果し状」で、最後に「あなたはペンと紙とが読めなくなり、自分でも書き、またひとにも書かせるがよい。こちらはこちらで書くから。小生乃至あの匿名氏にかかわる些細な事について、もしあなたのおっしゃることが正しくないのに、わたしがそれを正しいと云うようなことがあれば、そのときにはわたしにもう筆をとる力がなくなつたときのことです」と結び、全文極めて烈しい語調になっている。全体として見て、この『譬え話』は、『アンチ・ゲッツェ』の冒頭に据えるに適わしい、いや、欠くことのできない文章である。

注五 ニーダーザクセンの校長先生方——ハンノーヴァー高等学校の校長、シューマン (Joh Daniel Schumann, 1714~87) 同様にノイルツピンの校長、マーシヨール (Fr. Wilh. Mascho, 1787) 等を指す。ここではマーシヨールの『啓示キリスト教弁護』(Verteidigung der geoffenbar-ten christlichen Religion wider einige Fragmente aus der Wolfenbüttler Bibliothek, 1778/79) のことがまず槍玉にあがっているが、マーシヨールには他に『イエスの宗教に対する最近の攻撃究明』(Beleuchtung der neuesten Angriffe auf die Religion Jesu, besonders der Schrift

レッシング アンチ・ゲッツェ

von dem Zweck Jesu und seiner Jünger, 1778) がある。ところで、『断片』を発表したレッシングに最初に攻撃の矢を放ったのはシュエマンの『キリスト教論証の明証』(Über die Evidenz der Beweise für die christlichen Religion)で、レッシング匿名の『精霊と御力の論証』(Über den Beweis des Geistes und der Kraft, 1777)は之に対する極めて要を得た解答である。爾来教会側のレッシング糾弾は激しくなるが、かれらの背後にあって総指揮をとっていたのが、ハンブルクの主任牧師ゲッツェであった。レッシングのこの『アンチ・ゲッツェ』は直接この御大と最後の決着をつけんとしたものであった。なお後出(その四、その十一)リューベックのギムナジウムの副校長ベーン(Behn, Fr. Daniel Behn)もその一味だった。

注六 匿名氏——ライマールス(Reimarus, Hermann Samuel, 1694—1768)のこと。イギリス型の合理主義者で理神論者、一七二八年ハンブルクのヨハネ学院の東洋語教授、後ハンブルクのギムナジウムに数学を教う。極めて多方面な学者で、古典の文献に通ず。『匿名氏の断片』、詳しくは『アポロギー、一名合理的崇神家を弁護する書』(Apologie oder Schutzschrift für die vernünftigen Verehrer Gottes)は三十余かかって書上げた大著。生前未発表、死後これを遺児ルイーゼ嬢から委託されたレッシングは一部を『紀要』(詳しくは Wölfenbüttler Beiträge zur Geschichte und Literatur)に一七七七年『匿名氏の断片』(Fragmente des Ungenannten)という題名で発表した。残りの部分はすでに一七七四年から一七七八年に亘りシュミット(C. A. E. Schmidt)なる匿名の篤志家が『ウォルフエンビュッテル断片作家未刊文集』(Übrige noch ungedruckte Werke des Wolfenbüttelschen Fragmentisten)と題して出版、十九世紀の後半の初め更にその残りをクローゼ(Wilh. Klose)が編纂して、『ニードラー歴史神学雑誌』(Nieders Zeitschrift für historische Theologie, 1850~52)に発表したというが、完本は未だに出ていないようだ。

ライマールスはヴォルフ学派中でも最も急進的な理神論者で、スピノーザやフランス唯物論に組せず、そうか云ってまたライプニッツの予完調和説にも同せず、物理的乃至心理学的交互作用をもってこれに代えた。イギリス理神論の立場から既成宗教のあらゆる天啓なるものを否定し、殊に新約聖書に仮借なき歴史的批判を加えた。彼の意義は福音書に対する従来の教義的解釈を打破して、キリスト教に新しい歴史的批判の道を拓いたことにある。

注七 暗闇を歩きまわる云々——旧約、詩篇第九十篇、第六節参照。

注八 あなたのために校合云々——一七六七年ウォルフエンビュッテル図書館に行った当座は、ゲッツェとの間もよく、文学的活動のために本職の方がお留守にしまいかと心配してくれた位だったが、ゲッツェが自著『ニーデルザクセン聖書史』のためにウォルフエンビュッテル図書館蔵の聖書について何かひと言ふた言云つてくれと手紙で頼んで来たのに、偶々エーヴァが死産し、危篤の状態にあったところからレッシングが返事を出さなかった。それをゲッツェは何か含むところがあつたかのように解して感情を悪くした。

注九 「芳しからぬ」断片——『論叢』七十号所載のマーシヨの文章(注三)は「この芳しからぬ断片」という言葉で始まっていた。

注一〇 帝国最高裁判所の云々——ゲッツェは『やしあつてのこと』(Etwas Vorläufiges, 1778) 其他でもわかるように(本文その二参照)、ブラウンシュイク政府当局及び宗教問題に関する最高機関たる帝国最高裁判所当局に向つてレッシングに対し何らかの措置に出るように策動したことは事実である。リラ版注によれば、ここでレッシングが云つてゐるのは、同書十八頁でブラウンシュイク宮廷「顧問官レッシング氏が活字にしてまで世に問われた匿名氏の断片、就中特に筆者がキリスト復活の事実をくつがえし、使徒をば極めて忌むしき詐欺、嘘言者のように云わんとしているのは、およそ忌むしきものの最たるものであります。この種の策動に無関心でいられるものは、キリスト教をば空虚な妄想となすものでなければ、有害な迷信となすものであり、市民制度の幸福とてもすべてこれキリスト教に基くものであるということ解しない、また解しようとしなもので、国民が協力一致して共和国とでもなれば、お上の権利の拠つてもつて立つてゐるところの聖書の言葉すら迷蒙と悪口を云つてあやしまぬような考えの持主でしかないであります」云々とある箇所をさす。

注一一 ヨーゼフ二世——Joseph II (1741~1790) 一七六九年即位、摂政位にあつたが、一七八〇年母のマリア・テレージアの死後、正式に帝位に即き、啓蒙時代のいわゆる開明君主の名君ぶりを發揮した。世にヨーゼフ主義という。特にプロイセンのフリードリヒ二世に対する対抗意識が強く、フリー・メイソンに加入、教会内における教皇権を制限せんとする所謂フェブロンニアニズムを一段と進め、教会と国家の分離を策し、諸侯その他持権階級の力を打破しようとした。だがこれらの新らしがりやの社会・教会政策も附焼刃の嫌ひあり、徒らに諸侯の反抗を買うばかりで、結局再びテレージアの昔にかえらざるを得なかつた。

注一二 バールト——Bahrdt, Karl Fr. (1741~91) 極めて自由主義なプロテスタント神学者、ライプツィヒからギーゼンの大学に招かれたが、結局所説矯激なりとして罷免さる。ゲッツェも彼の『新訳新約聖書物語』(Neueste Offenbarungen Gottes in Briefen und Erzählungen,

レッシング アンチ・ゲッツェ

eine eigenwillige Übersetzung des Neuen Testaments, 1773~75) を「神の御言葉を故意かつ無暴に冒瀆するもの」と批難す。一七七八年二月二十六日帝国最高裁により禁示さる。もっとも当時の当局者はゲッツェすら、パールトを弁護し、皇帝の禁令に対し不逞極る暴言を吐いたと云っている位だった。

注一三 わが隣人のお談議云々——ルッター派の監督牧師レス (Joh. H. Res, 1723~1803) が匿名の『キリスト復活史論』(Die Aufstehungsgeschichte Jesu Christi, gegen einige im vierten Beitrage zur Geschichte und Literatur aus den Schätzen der Herzoglichen Bibliothek zu Wolfenbüttel gemachte neuere Einwendungen verteidiget, 1777) のこと。副題の示す通り、『匿名氏の断片』に向けられたものだが、偶々発行所が『論叢』と同じくウォルフエンビュッテルのワイゼンハウス書店だったことから、レッシングはこの論敵の本名を知り、レスのことを「隣人」と云ったわけである。レスはライマールスが第六断片にあげている矛盾を六つの対話の形で答えているが、その中で B (レス) は『断片』のためにすっかり信仰のぐらついた A に、自説が福音史家と一致していることを立証し、A を説得して信仰に帰らせるといふことになっている。なお次注参照。

注一四 『第二答弁』 前注レスの前掲書を『再抗告』と解し、これに対する反駁を『第二答弁』(Duplik) という法律用語を以て題名とし、一七七八年一月刊行す。序論に当る初めの三章で先ず彼の立場と理神論(自然宗教)との相違、並びに当時の福音主流派との相違を『編者の反論』に結びつけて再度説明し、次いで項目別に検討している。之に対しレスは『第二抗告反論』(Die Aufstehungsgeschichte Jesu Christi ohne Widersprüche gegen Duplik, Hannover, 1779) に応酬しているが、何ら新しきところなく、レッシングも別に之には答えていない。即ちレッシングはこの『第二答弁』という題名に注して「答弁であって、再抗告ではない。というのは、私は福音書家も自分も被告だと思っているからだ」と云っている。

注一五 梶も秤も云々——旧約、箴言、第二章一〇節に「互に違った二種のはかり、二種のますは、ひとしく主に憎まれる」とあり。ゲッツェは『アルトーナ・ポストロイター』紙におくった論文(第三十)で「マーショの書なんか批評したことはない」と書いている。なお後出『アンチ・ゲッツェ』その三の終りに附した『アルトーナ・ポストロイター』の論文の紹介に対する回答参照。(次号)

注一六 トロヤ人であれガリシヤ人であれ——ウェルギリウスの『アイネーイス』第十卷一〇八節にある言葉。敵であれ味方であれ、かまわな

いという意。

注一七 藁の盾——『公理』その十の終の方で、レッシングは「慰めこそキリスト教の難攻不落の砦というものだから、これをゲッツェが藁の盾にすぎないと云っているのは、まことに情けない話だ」と述べている。

注一八 自然主義——自然宗教のこと。神は直接の啓示ではなく、自然を通してのみ啓示されるものだと言く理神論の一つの典型。

注一九 アルベルティ——(Alberti, Julius Gustav (1727~1772)) ゲッツェが主任牧師だったハンブルクのカテリナ教会の副牧師。一七六九年、ハンブルクの教会で以前から普通懺悔日に朗読されてた詩篇、第七九篇(「アサフの歌」)の第六節に「どうか、あなたの知らない異邦人と、あなたの名を呼ばない国々の上に、あなたの怒りを注いでください」という一節を説教から除こうとしたのにゲッツェが反対して論争が起ったが、次いで一七七一年ゲッツェはその著『宗教対話手引』(Anleitung zum Gespräch über die Religion)の中で、ルッター派の教理示教書に反対したところから教会内で主任牧師ゲッツェとの間に論争が再燃し、その論争中に仆れた。

その二

注一 勝てっこない云々——ルーカーヌスのこの言葉は、彼の未完成の大作『ファルザリア』第一卷(十二行目)よりの引用という。Luc. || Lucanus, Marcus Annaeus (39—65) ローマの詩人、コルドバ生れ、セネカの甥で、皇帝ネロの側近として寵を得たが、文才が仇となって却って不興を買った。詩文に托してネロ及びその寵臣を嘲る。ピソの叛に加わり、死刑を宣せられたが、刑期をまたず自決す。畢生の大作『ファルザリア』(Pharsalia)は共和制末期の内乱(シーザーの勝利まで)を、ストア的反対派の立場から取扱ったもの。タキトゥス始め後のダンテ、シェークスピアその他古典作家をはじめ、ゲーテ等も高く評価している。

注二 やしあだこの御区騒——Goeze, 《Etwas Vorläufiges gegen des Herrn Hofrats Lessings mittelbare und unmittelbare feindliche Angriffe auf unsere allerheiligste Religion und auf den einigen Lehrgrund derselben, die Heilige Schrift》のこゝで、一七七八年復活祭に発表する。内容は一七七七年十二月十七日及び翌七八年一月三十日のゲッツェの評論の外に、元来『論叢』に発表するつもりで書かれたベーンの『イエス復活史弁』(Behn, Verteidigung der biblischen Geschichte von der Auferstehung Jesu)の紹介文とレッシングの諸作に対する批評で

レッシング アンチ・ゲッツェ

いずれもゲツェのレッシング譏諷の書だった。

注三 一番搾り——原文では *Vorlauf* は葡萄酒醸造に当り、ブドウの房を先ず圧搾器に入れて搾り出した搾り汁からとったものだが、ブランデーの場合は何年かねせておいた葡萄酒を更に蒸溜器に入れて蒸溜するとき最初に出来る最も強い精淳なものをいう。

注四 *Aquivoken*——文章の意味があいまいで、多意多様にとれ、わけのわからぬをいう。ラテン語の単数名詞 *equivocum* の複数形 *equivoca* をドイツ化したもの。レッシング注にある通り、それをゲツェが *Equivoken* と書き間違えてたのを揚足をとって皮肉ったまで。

注五 *Aequivocum quas dicas, equi vocum*——ここでは *equi vocum* 「馬の啼声」と明かに二字、*aequivocum* と語呂をあわす。この言葉は、カルダーノの『世はさまざま』(*De varietate rerum*, 1556) 第七卷三十章からの引用。レッシングはこれについてのノートの中に「カルダーノは馬の嘶きを五通りばかり挙げているが、みなそれぞれ特定の意味があるものなのだ。彼は馬のいろいろな嘶きにそれぞれいろいろな感情の表現を見ている」と書いている。カルダーノ (*Cardano Girolama*, ラテン名 *Hieronymus*, 1501~176) パヴィア出身の典型的ルネサンス人、一五三四年にはミラノ大学で数学を教え、同五九年パヴィアに帰り同地の大学、次いでポローニアの大学で医学を教う。博學多才、著書また極めて多方面に亘るが、就中自叙伝 (*De vita propria*) が有名。キリスト教を異端異教と同列視したというので、無神の徒と排撃されたが、レッシングは夙にこのファウスト的人物に傾倒し、『カルダーノ解嘲』(*Rettung des Hier. Cardanus*, 1754) を書き、大いに寛容の精神を説いた。

注六 ルッターが……道化役——ルッターが『道化芝居駁論』(*Wider Hans Wurst, Wittenberg* 1541) の中で、ウォルフエンビュッテル公ハインリヒ・ユーリウスに苦言を提するに当り盛んに下手な洒落をつかっただのを擲論したもの。ハインリヒ、フォン・ウォルフエルビュッテル (*Heinrich Julius, Herzog von Braunschweig-Wolfenbüttel*, 1564—1613) はイギリス喜劇役者の影響をうけて、ドイツにもちゃんとした舞台とレパルトアをもった芝居をつくらうとし、封建君主(従って、封建君主的イデオロギー)ながら材を一般民衆の日常生活にとつて現実に近いお芝居喜劇や狂言をつくった。というのも、ウォルフエンビュッテル家は、その名の示す如くウォルフエン(ゲルフ)で皇帝派(ギベリン)に比すれば民衆的進歩的だった。ハインリヒがプラハのハープスブルク家に仕えながら、比較的視野の広い国民劇の創説に力を尽したのも、そうした伝来の傾向によるものと云えよう。——ウォルフエンビュッテルの司書とは、勿論レッシング自身のこと。レッシングは

ルッター派（福音派）の教会の家に生れながら、ルッターに対しては相当批判的だった一方、カルヴァン派（改革派）に同情的だった。

注七 自然な標識——画家や彫刻家が表現の手段とする点、線、形、色彩といったものを指す。之に対してレッシングは文学者が表現の手段として用いる音声のようなものを恣意的な標識と呼んでいるが、ここではそんなことに抱泥する必要はなさそうである。

注八 オヴィディウスのように云々——ローマの哲人政治家セネカの『論集』(Seneca, Controversiae) 第二巻第一〇章にある話に、オヴィディウスが友人から自分の詩のうちから三節削除するよう求められたとき、受諾の条件として相手方にどうしても削除することのできない必須の三節を示すように要求した。そしてお互に意中の三節を誌したところ、同じ三節が出たという。これについてセネカは「各自自分の欠点はよく承知していたが、それがまた好きなのであった」と附言している。即ち自分の欠点とするところが他人には長所だったりするものである。オヴィディウス(オヴィド)は注するまでもなく、『恋愛術』(Ars Amatoria) 『変形物語』(Metamorphoses) 等、ひろく知られたローマの文人で、至っての通人。詩才により社交界の花形となったが、追放に処せられ流謫中も盛んに筆をとる。

注九 隠喩——Metapherの訳語、暗喩とも訳す。譬喩を用いた修辞法的一种だが表現のスタイルとして、……のようだとか、……の如しといった形をとらず、例えば、邪魔だというのを「目の上のたん瘤」と云うが如し。之に反して、直喩(Gleichnis)は同じ譬喩でも、……のようだ、……の如く、という表現の形式をとる。ところが換喩(Metonymie)となると、隠喩とは違って形式上の類似性を離れて内容上の論理に重点がおかれることになる。即ち「彼は狐のように狭い」と云えば直喩だが、「彼は狐だ」となると隠喩となり、更に「彼はゲーテのライネッケだ」となると換喩ということになる。寓喩(Allegorie)も、象徴(シンボル)同様一種の隠喩と解されよう。

注一〇 Tertium comparationis——二つのものを比較して、その間共通の一致点の見出されれば、その公約数のようなものを指す。

注一一 演劇の論理——ゲッツェがレッシングの論法を蔑んでこう云ったのを、逆手にとったままで、まさに弁証法的な演劇の論理である。後にレッシングは『賢者ナータン』の大司教に「人間の傲慢な理性」、宗旨の事になるとややもすれば誤り易いことだが、観面にお判りだろう。……今の話が知慧才覚の劇作にすぎぬとすれば、真面目に考えてみるだけのこともあるまい。あなたはこの事件を劇場にもち出すがい、さすれば賛否いずれにせよ大喝采を博すかも知れぬ」云々(第四幕第二場。——篠田英雄訳)と云わせている。

注一二 アブラハム神父——聖クララのアブラハム(Abraham a Santa Clara, 本名はウルリヒ・メーゲッゲル Hans Ulrich Megerle, 1644

レッシング アンチ・ゲッツェ

—1706) のこと。カプチノ会洗足派修道会の神父で、傑出した教会説教家かつ著作家。中世末期来流行の劇作者風文体で数多くの優れた説教、宗論、訓話、随筆その他を書く。いずれも当時の風俗を描いて鋭く時代を風刺す。シラーの『ワレンシュタイン』に出て来るカプチノ派説教師は彼をモデルにしたものという。全集二十一巻あり、四巻の主著『ユダ』(Judas der Erzschelm, 1686/95) は聖書のユダの生涯を勸善懲惡風に描く。

注一三 シュロッサーのことを云々——ハンブルク在ベルゲドルフ教会の主任牧師シュロッサー (Schlosser, Joh. Ludwig, 1738—1817) が、学生時代に書いた自作の戯曲を、一七六六年ハンブルクで上演、上梓したところ、ゲツェは「舞台と教会に兼業するのは、牧師にふさわしからざること」と批難した。